

平成21年9月1日
原子力安全対策課
(21-37)
<11時00分記者発表>

大飯発電所2号機 1次冷却材中の放射能濃度の上昇について

このことについて、関西電力株式会社から下記のとおり連絡を受けた。

記

大飯発電所2号機（加圧水型軽水炉；定格電気出力117.5万kW）は、定格熱出力一定運転中の平成21年8月31日、定例の1次冷却材中のヨウ素（I-131）濃度の測定*を行った結果、前回の測定値（8月28日、0.49Bq/cm³）を若干上回る値（0.65Bq/cm³）が確認された。

このため、1次冷却材中の希ガス濃度の測定*を実施したところ、前回の定例測定値（8月25日、7.9Bq/cm³）を上回る値（190Bq/cm³）が確認されたことから、燃料集合体からの漏えいが発生した疑いがあると判断した。

現在のヨウ素濃度は、保安規定で定めている運転上の制限値（63,000Bq/cm³）に比べて十分に低く、発電所の運転および環境安全上の問題はないと判断されることから、1次冷却材中の放射能濃度の測定頻度*を上げて監視を強化し、運転を継続する。

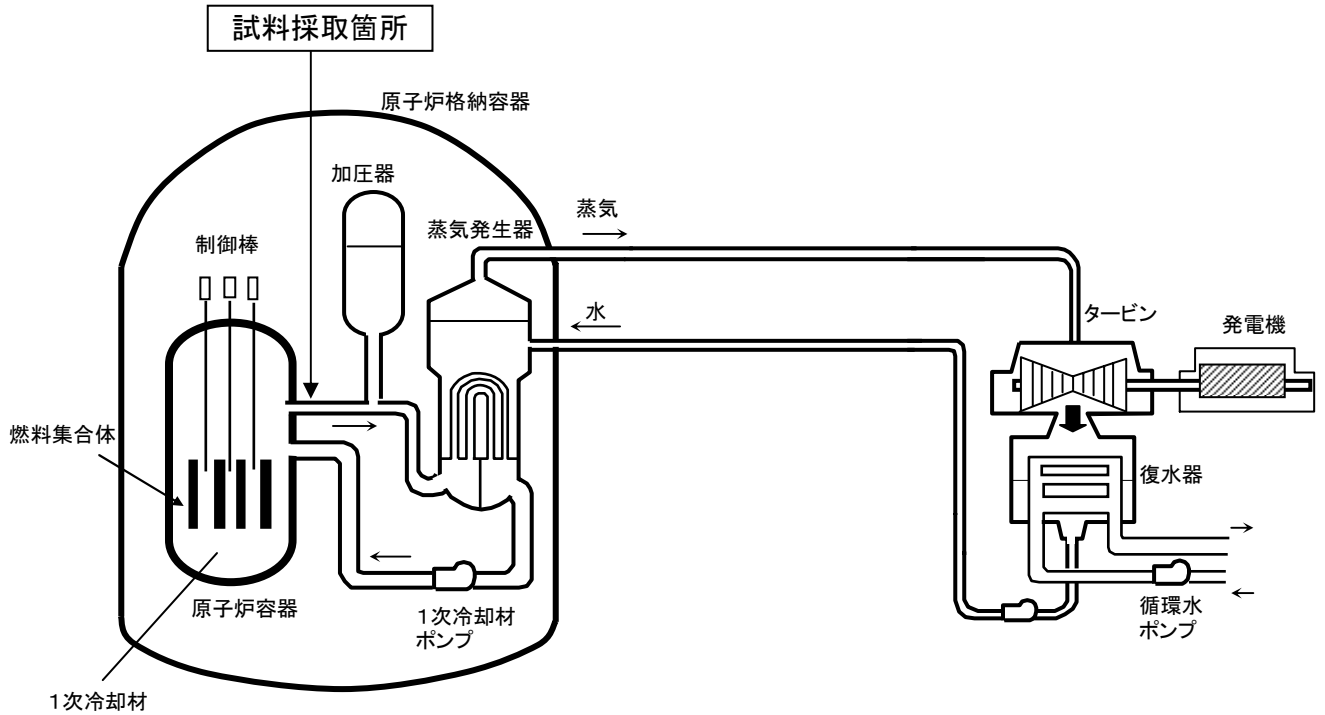
なお、この事象による環境への放射能の影響はない。

※燃料ペレットを収納している燃料被覆管に、ごく僅かな漏えいがあると、燃料被覆管内のヨウ素や希ガスが1次冷却材中に放出され、その濃度が上昇する。このため、1次冷却材中の放射能濃度を測定し、その変化から漏えいの有無を判断している。

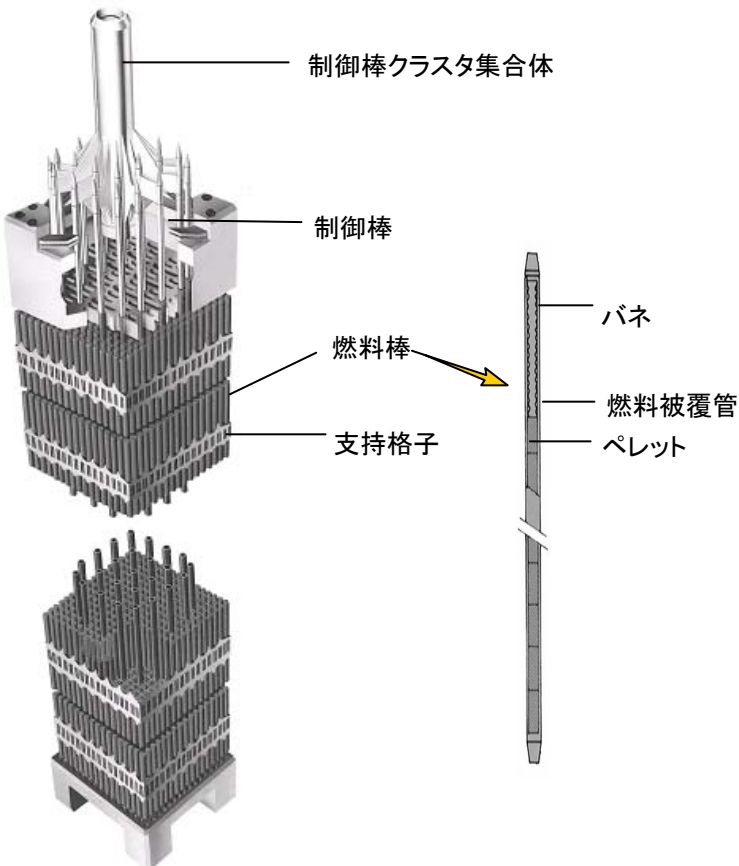
測定項目	定例測定	→	監視強化
ヨウ素濃度	3回/週	→	1回/日
希ガス濃度	1回/週	→	1回/日
全放射能濃度	1回/月	→	1回/週

問い合わせ先(担当：久保田)
内線2352・直通0776(20)0314

大飯発電所2号機 1次冷却材中の放射能濃度の上昇について



燃料集合体概略図



【燃料集合体の仕様】

燃料タイプ: 17×17型
 全長: 約4m
 全幅: 約20cm
 支持格子数: 9個
 燃料被覆管材質: ジルカロイ-4^{※1}または
 ジルコニウム基合金^{※2}
 燃料被覆管外径: 約10mm
 燃料被覆管肉厚: 約0.6mm
 装荷体数: 193体

※1: 最高燃焼度48,000MWd/tの燃料

※2: 最高燃焼度55,000MWd/tの燃料